

BLUESKY

KU8C

2021.7

目次

1. 空を飛んだ日

2. プリン日記

3. マリンブルーの彼方

空を飛んだ日

空が、迫る。

少女は、空を見ていた。

恐ろしいほどに青く澄んだ空が、地上を呑まんとするかのように近づいてくる様を見ていた。

眼下では、大勢の人々が迫り来る空を見ては口々に喚いていた。

指を差して驚く者、スマホを空にかざす者、逃げ惑う者。

それらは総て、空が迫り来るという現実を持って余しているように少女の目には映った。

何故か少女には、この空が自分に襲い掛かって来るようには思えなかった。

根拠も何もない思い込みのようなものだったが、疑いの余地はなかった。

青々とした空を見つめながら、少女は思い出した。かつて、空を飛ぶのに憧れていたことを。

母を亡くした時、幼かった彼女に大人は言った。

「ママはお空へ行ったんだよ」

その台詞が嘘だと分かるのにそう時間はかからなかったが、少女はいつしか、青空を寄辺とするようになった。

暇な時、悩んだ時、遣る瀬無い時は決まって丘の上で青空を眺める。今日もそうしている最中だった。

空を飛べたなら。

狭く汚い現実を抜け出し、綺麗な青空を飛べたなら。

少女はこれまで何度も夢想した。

まさか、空の方から迎えに来てくれるとは――

少女は何も言わず空に手を伸ばし、軽く地面を蹴った。

最初から全部知っていたかのように、その動作には迷いがなかった。

彼女の体は宙に浮いた。浮いている本人もその理由は分からなかったが、そんなことはどうでもよかった。

中空で体を操りながら、少女の心は喜びに満ちていた。失ったものが蘇るような感動を覚えた。現実のしがらみが全て、雲に溶けていくようだった。

少女が地に降り立つことは もうなかった



プリン日記



今回のテーマである「青空」という単語から、「満点☆青空レス
○ラン」を思い浮かべた私。
そんな食い意地張りまくりの筆者は、ここ数日「プリンの食べ比べ
がしたい」という欲望のもとプリンを食べまくりました。
そうしてできた『プリン日記』がこちらです。



レトロプリン

価格162円

甘さ★★★★☆

やわらかさ★★★★☆

コスパ★★★★☆



バイト帰り、自分へのご褒美
に買った。

固め。カラメルの味がよい。
香ばしくて上品な甘さ。添
加物がないので、自然体な
味。落ち着く。レトロな喫茶
店で食べてる気分。

窯出しとろけるプリン

価格149円

甘さ★★★★☆

やわらかさ★★★★★

コスパ★★★★☆

めちやくちやとろける。
なんかもう飲めそう。
カラメルの香ばしさもよ
き。ここ最近のお気に入
り。よし、明日も
買ってこよう。





ホップクリームミルクプリン



価格218円

甘さ★★★★☆

やわらかさ★★★★☆

コスパ★★★★☆

とにかく濃厚。ミルク感満載。甘さよりもミルクの味が勝ってる。でも重すぎない。クリーム好きな人にとってはパンザイなやつ。クリームとプリンの中にカラメルが挟まってる新しいスタイル。

とろなまプリン



価格178円

甘さ★★★★☆

やわらかさ★★★★☆

コスパ★★★★☆

比較的大きめなぷりん。たまごのお味が割としっかり。カラメルソースも甘めでよき。やわらかすぎないけど、口に入れるととろける～。心もとろける～。生き返る。純粹に美味しい。明日も頑張ろうって思える～。



生とろぷりん



価格168円

甘さ★★★★☆

やわらかさ★★★★☆

コスパ★★★★☆

クリーミー！！濃厚！！なめらか！！

いやな牛乳くささとかがなく、食べやすい～。人生もこれくらい甘くていいのでは。今日はプリン食べながら人生のこと考えた。





メイトーのなめらかプリン

価格108円

甘さ★★★★☆

やわらかさ★★★★☆

コスパ★★★★☆

口どけがめちゃくちゃなめらか。体に染み入る甘さ。コーヒーとの相性◎
けっこう甘めだけど、いやな甘さではないからパクパク食べれる。5個ぐらいいけそう。メイトーさんの商品はいつも美味しい気がする。



牧場のソフトクリーム風プリン

価格168円

甘さ★★★★☆

やわらかさ★★★☆☆

コスパ★★★★☆

クリーミーだけど爽やかで、確かにアイスクリーム感あり。食感はやや豆腐寄りかも。パンラの香りがふわっと香る。こってりしてなくて、すっきりした味わい。コンビニでソフトクリームとプリンのどっちを買うかで悩んだら、これにしましょう。



ロイヤルカスタードプリン

価格194円

甘さ★★★★☆

やわらかさ★★★★☆

コスパ★★★☆☆

やわらかい。とろける。優しい味。カラメルが別添えなの最高。カラメルの苦さと香ばしさがプリンの甘さに合う。お高めだけどリピしたいやつです。





香ばしピスタチオのプリン

価格172円

甘さ★★★★☆

やわらかさ★★★★☆

コスパ★★★★☆

蓋をあけた瞬間、ふわっと香るピスタチオ…！！思った以上に濃厚で、ピスタチオがぎゅっと濃縮された感じ。美味です。食感もなめらかで好き〜。
個人的に色が綺麗で好き。

生プリン

価格214円

甘さ★★★★☆

やわらかさ★★★★☆

コスパ★★☆☆☆

なま。生です。口にいれたらふわっと広がるカaramelの風味が最高。カaramelだけで飲めそうな美味しさ。プリン自体も濃厚で、いい材料が使われてそうな感じ。卵寄りというより、生クリーム寄りの味です。毎日食べたい……。



いかがでしたでしょうか。気になるプリンはありましたか？
こうして改めて食べたプリンを振り返ると、総カロリーを覚えてしまってます☆
でもどれも美味しくて、食べている間とてもしあわせでした。
今回ご紹介したプリンはすべてコンビニで購入しました。プリンを探して近くのコンビニをめぐるのが楽しかったです。今度は菓子パンの食べ比べをしてみたい……！
それでは、最後に私が好きなフレーズを載せておきます。

美味しく食べればカロリーゼロ☆



マリンブルーの彼方

いつものように、海の絵を描いていた。窓辺から見える、海の景色。ただまっすぐに無限に広がって見える青い海は、私にとって、自由の象徴だった。

鉛筆描きだと、物足りない。色を塗りたい。また画材買わなきゃな。

昼食をとって間もない時間だからか、ぼかぼかした陽気もあいまって意識がぼんやりしてきた。昨日も、あまり寝られなかった。

絵を描いていた。——はずなのに、気づいたら私は海辺にいた。潮風が頬に触れる。私の足は、自然と海の水の中へと吸い込まれていく。

——沈む。どこまでも。水中から見上げる水面が、太陽の光をきらきらと映し出している。——ああ、なんて綺麗なんだろう。光って、一色じゃないんだ。こんなにたくさんの色が混ざり合っていてくるんだ。

しばらくの間、私は恍惚としていた。そして、夢心地のなか、次第に意識が遠のいていった。

「ちょっとアナタ！こんなところに寝てたら危ないわよ？」

突然肩を揺すられて、私ははっとした。——私、寝ていたの？

「うわっ」

私の顔をのぞき込む人の姿を見て、私は仰天した。

——なに、この人。……いや、正しくは「人」じゃ、ない。「人魚」といった方がいいだろう。下半身がエメラルドグリーンのうろこで覆われていて、サファイアのような、ターコイズのような色の尾ひれが波に揺られている。

えっ……。波？ここは海のなか？
どういうこと、私、なんで息ができてるの？

「——アナタ、ひどく顔色が悪いわね……。いいわ、私のおうちで少し休ませてあげる。すぐそこなの。その様子じゃ、自分で家まで帰れないでしょう？」

返事を待たずして、人魚は私の腕をさっと掴んで進みだした。かなり強引な人魚だ。でも、悪い人ではないような気がする。

私は現状を飲み込めないまま、ただなされるがまま人魚に手を引かれ、波に身を委ねた。

——そして気がついた。

ここは、単なる海の底ではないのかもしれない。
よく見てみれば、ここにいる生き物たちはみんな、不思議な姿をしていた。

馬のようなたてがみをなびかせながら優雅に泳いでいく魚。
イルカのような形をしているが、孔雀の羽のように妖艶な尾ひれを持った生き物。
きらきらと輝くサンゴ礁の間からは、翼の生えた小魚が顔を出し、群れを成してどこかへ泳いでいった。

私の知っている海の中の景色よりもずっと、優美で魅惑的で、幻想的だった。

うっとりしているうちに、人魚の家に到着したようだった。

「さあ、入って。その部屋のベッドを貸してあげる。しばらく休んで。あとであったかいスープを持って行ってあげるわ。」

人魚はそう言うと、私をふかふかのベッドに寝かせてくれた。
ベッドに接している壁には窓があり、その透明なガラスを通して、さっきまで目にしていた美しい生き物たちを再び見ることができた。

しばらくして、人魚がスープを持ってやってきた。この世界のスープを私のような人間が食べられるのかと不安になったけれど、それは杞憂だった。

「……美味しい。」
あったかい。ほっとする味だ。
久しぶりに、落ち着いてご飯を食べた気がする。

急にのどの奥が熱くなって、頬に生あたたかいものが伝った。

「——ちょっと、大丈夫？」
人魚が涙を拭いてくれた。

心配そうに見つめる彼女の瞳がやけに美しくて、でもそれ以上に優しい色をしていて、私は彼女にすべてを打ち明けてしまった。

私は今日、自分の意志で海に沈んだのだと思う。

これまでずっと、私にとって、絵を描くことが生きがいだった。

私が心惹かれるもの、綺麗だと感じるもの、魅了されるもの——それらをひとつの枠の中に表現する時間は、すごくわくわくして、幸せで、生きていることを実感するのだ。

だけど、画家になる夢を語ったとき、両親は猛反対した。

——そんなんじゃない。食べていけない。画家として成功する人はほんの一握りなんだ。あなたには、安定した、幸せな生活を送ってほしいのよ。あなたのことを思って言ってるの、わかるでしょう？

確かに、その通りだよ。画家として生きることが決して甘くないことは、私もわかってる。私は絵を描くのが好きだけど、別に才能があるわけじゃない。これまで何度も絵画コンクールに作品を出してきたけど、賞なんて貰ったことがない。

そして今日、またひとつ、コンクール落選の知らせが届いた。落ち込む私を見かねてか、父は私の部屋にある画材をほとんど全部持ち出して、無理にでも私を絵から引き離そうとした。

それがかえって私の心を引き裂いた。

父も母も、私の将来が心配なんだろう。でも、それでも、わたしはこれで生きていきたい。これだけなんだ、これだけが、私の人生で本気でやりたいと思ったことなんだ。絵のない人生なんて、考えられない。

——私の気持ちも、わかってよ。お父さん、お母さん。

一通り話し終わると、私は疲れ切ってしまって、いつの間にか眠っていたようだった。

目が覚めたとき、窓から見える海の世界は、さっきよりも薄暗くなっていた。——夜になったんだ。

「あら、起きたのね？」
人魚がそう言って微笑んだ。眠っている間ずっと、そばにいてくれていたようだった。

「せっかくだから、夜のお散歩にでてみない？——アナタにもっと、この世界を見てほしいの」

夜の海の世界は、昼間よりもずっと美しくて、神秘的だった。

この世界の生き物はみんな、とても綺麗な色をしている。
ところどころで、サンゴ礁や海藻が優しい光を発していて、その光を受けた生き物たちは一層、美しいオーロラのような色を放った。

「ほんとに綺麗だね。——絵に描きたい。」
思わずそうつぶやいた。
絵を描いて、この美しい世界を表現したい。

「あたし、アナタのような人はすごいと思ってるわ」

突然、人魚が私を見つめてそう言った。

「え？」
「あたしにとっては、この光景は『当たり前』なの。別に、綺麗だともなんとも思わないわ。だって、毎日、目にする景色だもの。」

「……」

「あはは、『よくわかんない』って顔してるわね。……生まれてこのかた、あたしはこの景色しか知らないし、この景色に慣れ切ってるから、何も思わないし、感じない。

——でもあなたは違う。あなたはきっと、毎日同じ景色を見ていても、そこにいつも新しい何かを見出す人なんじゃないかなって思うの。」

「……ふふ。そんなこと言われたの初めて。——でも、海は毎日違う姿を見せてくれるものだよ。だから私は日々違うその美しさを絵に描いてるだけ——」

ふと、不思議に思った。

私、「毎日、海の絵を描いてる」なんて、あなたに言ったっけ——？

そう思って人魚の顔を見ると、彼女はとてもあたたかい表情でこちらを見つめていた。

その柔らかい表情になんだか懐かしさを覚えたとき——

急に意識が遠のいた。

「……真凜、……真凜！」

名前を呼ばれて、目が覚めた。

お母さんの声だ。必死の形相で、私の名前を呼んでいる。

私は、病室のベッドに横たわっていた。

「……お母さん……」

「よかった……！意識が戻ったのね。——よかった、本当によかった……。」

母はひどくやつれていた。

——私、心配かけちゃったんだ。

「……ごめん、お母さん」

母は横たわる私の体に顔をうずめて、泣いた。母が泣くのを見るのは初めてかもしれない。

隣に、父が立っていることに気がついた。

父も、眉間にしわを寄せて、私がこれまで見たことのないような表情を浮かべていた。

目元が、少し赤い。

私は、今日、夢でも見ていたのかな。海の世界での出来事はきっと、夢の中の話だ。

体を起こそうとしたとき、ふと、指先に何かが触れた。

光に照らされてきらきらと光る、エメラルドグリーン。

——これは、彼女の——。

私は決心をした。

私はこれからも、絵を描いて生きていきたい。

「お父さん、お母さん。あのね——」

病室の窓から青い空が見えて、その美しい青が、海の青と重なった。

編集後記

表紙：あらい
最近地球がプレミしてんじゃないかって
レベルで暑いです。

空を飛んだ日：Field
いろんな作品からイメージをお借りした
モンタージュ的作品です。

プリン日記：ずもさん
美味しく食べればカロリーゼロ☆

マリンブルーの彼方：ずもさん
海に行きたい!!